

英語の基礎と、英語の基礎学習支援についての探究と実践例

Helping Students to Learn and Use the Basic Knowledge of English

柳瀬 実佳
Mika Yanase

要旨

大学には、様々な英語学習の目的や過去の英語学習の体験を持つ学生が集まっている。また、学生の英語習熟度や個人の性質や思考も様々である。大学は組織であるため、授業中に全ての学生に個人指導をすることは難しい事情を抱えているが、この現状を理解した上で、多くの学生にとって必要な学習支援について考えてみると、英語の基礎知識の紹介とその学習支援が一つの例として挙げられる。多くの学生は、「英語の基礎は簡単でむしろ低次元の知識」であり、「文法などが複雑な英語が高度な知識」と無意識にとらえがちである。本来、基礎とはその本質であり、それ全ての土台になるものである。学生の英語習熟度も、英語の基礎がどこまで深く広く適確に学生に理解され、応用されているかによっても変化する。英語の基礎知識を学習して、将来その基礎を活用し応用することで、大抵の英語がわかり、英語でコミュニケーションをとれるだけでなく、人生で必要なことでさえも英語から学べる可能性にもつながる。この英語の基礎知識には、例えば「英語のリズムと音声の基礎」「英語の語順の基礎」「英語の文法の基礎」「英語によるコミュニケーションの基礎」「英語の性質や本質についての基礎」「英語の学習における基礎」などの側面がある。本稿では英語の基礎学習支援の意義について端的に述べ、基礎学習のためのポイントと、基礎知識の紹介や学習支援としての授業の実践例の概要や詳細例をいくつか記す。

1. はじめに

学生の持つ個性や習慣をはじめ、学生の過去の英語学習体験や現在の英語習熟度、英語学習に関する目的や学習への意欲なども、学生の数だけ様々である。これらの学生たちにとって、無駄にはならず、多くの場合必要とおもわれる英語の学習支援の一つに、英語の基礎学習の紹介とその学習支援が挙げられる。基礎とは要となる土台である。この土台をしっかりと学ぶ前に、装飾部分の英語を学び出す勉強体験を過去に持っている学生たちも当然いる。その中には、英語の基礎学習を軽視しがちな学生も

いるが、その多くは、例えばTOEIC (5点～995点で採点される試験) の取得スコアに置き換えると、200点台から700点に満たないケースが多い。それ以上の英語の基礎の世界に触れたことがないために、その範囲の英語で満足してしまっている学生も少なくない。学生が将来、英語を活用できるようになるのみならず、英語の基礎学習を通して、なるべく理にかなった学習体験をすることは、学生の人生においても、いつか役に立つ可能性がある。英語の基礎学習は、将来学生が健全に、自尊心を持って、誠実に等身大の自分を英語で表現し、また英語を話す相手の真意を的確に理解しようとするなど、情報のやりとりの次元を超えた英語による心のコミュニケーションまでも可能にする。基礎知識の学習は、学生の英語の習熟度や学習目的などを選ばない、全ての学生にとって本来有意義な学習の一つである。基礎知識とは基本的に真実に則っていたり普遍的であるために、英語以外の分野においても、いつかどこかで学生がその知識や学習経験を応用できる可能性も含まれている。そのため、英語を深く愛して大切に学びたいとおもう向上心のある学生にとっても、また英語とはあまり縁がなく英語への興味も湧いていない学生にとっても、基礎知識の学習支援は何かしら有効であると、筆者は認識している。

II. 英語の基礎学習に含まれる要素の例と、学生の英語学習を可能にするために、学生に紹介している学習の要点

1. 英語の基礎学習に含まれる要素の例

英語の基礎学習とは、英語や英語運用の要で土台の部分の学習を意味するが、その基礎学習には、少なくとも「英語のリズムと音声の基礎」「英語の語順の基礎」「英語の文法の基礎」「英語によるコミュニケーションの基礎」「英語の性質や本質についての基礎」「英語の学習における基礎」などが含まれると認識している。本稿で後述する、基礎学習支援の実践の概要や詳細例は、この6つの基礎学習の要素に基づいている。

2. 英語学習を可能にするために、学生に紹介している学習の要点

英語への学習意欲の旺盛な大学生も近年は増加しているように認識しているが、さらに厳密に観察すると、英語以外の分野を専攻している学生で、必修科目としての英語の授業の受講のみで満足している学生の中には、学習そのものが可能になりづらい状態のまま、受講を始めている様子も見受けられる。学習を可能にするには、学習するという学生自身の意志と動機が肝心なため、自分を整理して学習支援を受けるためにも、筆者は次のような「学習のための要点」を、初回の授業で学生に伝えている。

学習のためのポイント

1. 英語学習に関する自分の動機や目的を自覚する。また、学習過程においても、自分の現状を知って、それを自分のデータとして、今後の英語学習に活かす。
2. 自分にとって未知の世界や、相手を知ろうとする気持ちを大切にする。自分には未知の世界をすぐに簡単に理解できるという思い込みがあるかないか、自分をみる。自尊と同様、他人(相手)を尊重する気持ちを大切にする。
3. 英語学習を通して自分を知る。英語で自己表現をするためには、自分の心の声や、普段の自分の視野、これまで無意識に身につけてきた自分の習慣や文化についてなど、等身大の自分をまずはそのまま自分で知る必要がある。また、自分が目的としている英語力を将来身につけた場合に、自分はその技能をどの様に活用する人間であるのかにも思いを馳せ、英語学習を通して自分について知っていく。
4. 自分の長所も短所も、両方ともできるだけ自覚して、五感なども含め、自分に有るもの全てを活かす。
5. 英語の学習上で問題が出てきたとき、自分でもその解決法を考えてみる。
6. 学習上で、ただ正解を出すことを目的にするのではなく、むしろ正解がわからなかったり、理解ができなかったりという現状を自覚し、自分の無知を知って、反省したり、視野を広げたりしつつ、学んでいく。その積み上げなどで、英語のより広い世界を知っていく。
7. 「英語のリズムと音声の基礎」「英語の語順の基礎」「英語の文法の基礎」「英語によるコミュニケーションの基礎」「英語の性質や本質についての基礎」「英語の学習における基礎」などの英語の基礎知識を学ぶ。

なお、筆者は授業をすすめるにあたり、学生がこれらの学習のためのポイントを実践する支援も行っている。

III. 英語の基礎学習支援の実践例の概要と詳細例

「英語のリズムと音声の基礎」「英語の語順の基礎」「英語の文法の基礎」「英語によるコミュニケーションの基礎」「英語の性質や本質についての基礎」「英語の学習における基礎」などの英語の基礎学習を支援する際に、教材として筆者は映画や音楽や教科書の他にも、授業によってはTOEICの試験問題なども活用しているが、ここではそれらを活用した基礎学習支援の実践例の概要と詳細例を挙げる。これは学生の学習項目のため、箇条書きにて記す。

1. 英語の音声の基礎知識を学ぶ：英語の発音には強弱があり、弱く発音されるところは早口になりがちであるため、弱く発音される部分とその前後の英語の音は変化することを知る。まずは単純に、よく聞こえてくる大切な情報の部分の英語から聞きとる。次に、弱く発音されて音が変わりつつ聞きとりづらい部分の英語（代名詞、冠詞、接続詞、関係詞、助動詞（be動詞）、前置詞等）について、音楽や映画の英語などに触れつつ理解する。
2. 英語の語順で理解する：英文を聞くととき（読むとき）に、英語の意味のかたまり (sense group) ごとに英語の語順のままその意味を理解しつつ、音読やリピート、シャドーイングなどをして、英語を聞きとれるように学習する。
3. 相手をキャッチしよう、未知を知りたい、などの自分の気持ちが必要なことを知る。
4. 五感を開いて、心でキャッチする必要性を体験する。
5. 自分にあるものを活用する（推測力、想像力など）。
6. 洋画のあらすじを日本語字幕を出さずにつかむ：洋画を日本語字幕を出さずに1本以上観る。このときに、話し手（登場人物）の表情や声のトーン、話し方やその英語のリズム、流れ、音調による表現、行間などの全てをできるだけ感じて、話し手の伝えたいことを推測してキャッチする。
7. 洋画の英語の台詞の詳細を理解する：洋画のいくつかのシーンの台詞を、目で確認する。まずは台詞を読みながら、英語の語順でsense groupごとにその意味をつかむ。次に音読やリピート練習、シャドーイングを行うことで、英語の語順で台詞を理解する。
8. 自分の現状を知る：1. ～7. ままでに学んだことを活用する目的で、授業で勉強した洋画のワンシーンの英語の台詞を聞きとる小テストを受け、どこまで聞きとれているかを自覚する。この小テストの詳細は次の項で後述する。
9. 自分の現状を自覚し、英語の音声の基礎知識を応用して理解する。（8. の小テストを再活用する。小テストの詳細については次の項で後述する。）
10. 自分で学習上の問題解決を目指し、自主学習を体験する：今後この洋画の台詞レベルの英語を聞きとるためにどうしたらよいか、自分へのアドバイスを8. で活用したテスト用紙にメモする。また、今回の小テストに向けて、どの様な勉強をしたかなど、自分の現状もメモする。
11. 洋画の台詞レベルの英語を細部まで聞きとり、理解する：英語の台詞のシャドーイングを授業中に数回ずつ行う。最終的には英語の語順でsense groupごとにその意味を理解しつつ、英文を見ずに台詞を聞きながらシャ

ドーイングができるところまで目指す。(なお筆者は、この洋画の台詞の音声を大学のポータルシステムにアップロードしたり、その音声が録音されているCDを学生に貸し出すなどして、学生が授業外にもこの洋画の台詞を聞きとる練習ができるように支援している。)

12. 洋画の台詞の他にも、授業によってはTOEICの教材なども活用して、英語の基礎的な文法を学習する。
13. 英単語の世界を知る：単語一つひとつの本質的な意味を理解する。学生は単語を辞書で調べて、そこに分類されている全ての意味に一通り目を通し、その本質に当たる意味を自分で感じ取り、レポートに端的にまとめる。(筆者は学生がその単語の本質をつかんでいるかを確認し、学生にアドバイスしている。)また、単語の接頭辞・接尾辞の知識も知って、活用する。
14. 推測力を磨く：洋画などをみて、英語の台詞や単語の意味を、その洋画のシーンの文脈や登場人物の表情、声のトーン、間の取り方などから推測する。(日本語字幕を出さずに理解することに苦手意識の強い学生がいる場合には、能や狂言などの現代日本語ではない言語を用いている古典芸能などをみせて、内容を推測してもらおう。次に比較的内容が推測しやすい洋画のワンシーンをみせて、内容を推測してもらおう。この実験後、古典芸能の方が洋画よりもその内容を推測しやすかった学生には、推測力そのものはあるので、あとは英語の基礎知識を少しずつ磨くことをアドバイスし、逆に洋画の方がその内容を推測しやすかった学生には、自分が認識している以上に英語(を推測すること)に慣れてきている事実を伝えている。また両方ともその内容をあまり推測できなかった感覚のある学生には、言語を問わず、推測すること自体にこれから慣れていく必要性が一つにはあることを伝えている。これにより学生が自分の現状を認識し、自分の能力を活かして英語力を磨く学習をすすめる支援をしている。)
15. 情報のやりとりのための英語力を磨く：TOEICやニュースなどの情報を扱う教材を活用し、英語を読む際に、スキミングをして大事な情報をキャッチするための練習をする。また、論理的に話し、書くための学習については、英語のライティングの学習やプレゼンテーションの練習も行う。英文の起承転結を知り、それに則った原稿を書いてプレゼンテーションをする。あるテーマに基づいて、論理的な思考で、事実と意見に分けてディスカッションをする。他。

16. コミュニケーション力を磨く：情報のやりとりのための英語学習にとどまらず、相手を理解しようとしたり、等身大の自分をそのまま表現することや、心でコミュニケーションをするための英語の学習をする。
17. 英語で自分を表現する。：自分の心の声を英語にのせる。自分の言いたいことを表す英語の表現を自分で見つけていく。
18. 想像力を磨く：自分の経験から得た知恵を活かして比喩を理解する能力を磨く。また、真実を知る人や真実が描写されている物に触れ、その世界観を感じる機会を持つ。人間や万物の普遍的なテーマを含む映画などをみて、感想を英語で整理して書いてから、口頭でも述べる。また、例えば洋画の中で描かれている世界観は、日本の文化の中にもあるのかという探究につなげるなど、普遍性にも目を向ける機会を持つ。
19. 学んだ英語や英語力を、自分はどの様に、どの様な目的のために、どう活用したいかについて思いを馳せる機会を持つ。
20. 自主学習につなげる：学生が興味を持った英語のもの（映画、音楽、学生の専攻分野に関する書物、ニュース、スポーツ関連の動画、漫画などなんでも可）を自分で見つけて、その英語に触れる。課題としてそれをレポートにまとめる。この学習支援の詳細については、稿を改める。

IV. 基礎学習支援のための授業実践の、その他の詳細例

1. 五感を開いて英語の流れにのり、全体像を感じ取る体験をする機会を持つ：洋楽を聴いて、その世界観を自分なりに感じる。英単語やフレーズから内容をキャッチするだけでなく、曲調や声のトーンなど全てのものから、その世界観を英語の流れにのったまま感じる機会を持つ。このことにより、英語を単語レベルでぶつ切りにして理解しようとする学生の癖を緩和する。

2. 英語の音声の基礎知識の紹介

英語の強弱のリズムを体感して慣れる：アップテンポの洋楽を活用して、英語の強弱のリズムをそのままに、輪唱するようにコーラスの部分进行を歌う。例えばビリー・ジョエルの*River of Dreams*の歌詞の、次に抜粋したような下線部のコーラスパートを輪唱するように歌ってもらうことで、英語の強弱のリズムに慣れる機会を学生に提供している。授業で何度か輪唱を繰り返すうちに、アップテンポの曲であっても、その英語の強弱リズムに学生はわりとすぐに慣れる傾向がある。

In the <u>middle of the night</u>	I go <u>walking in my sleep</u>
From <u>the mountains of faith</u>	to <u>a river so deep</u>
I must be <u>looking for something</u>	Something <u>sacred I lost</u>
But <u>the river is wide</u>	<u>And it's too hard to cross</u>

(*River of Dreams* より抜粋)

3. 洋画の台詞を聞きとる小テストを活用することで、学生が自分の現状を知り、自主学習にもつなげる支援

前述したこの小テストの問題形式は、授業で勉強した映画のワンシーンを3回聞いて、2種類の設問を解くものである。設問の一つは英語の1文を丸ごと聞いて、それを英語のまま書き取るディクテーションで、もう一つの設問は他の英語の台詞の1文を丸ごと聞いて、それを日本語に訳すものである。なお、学生が台詞を英語として聞きとれない場合や、和訳できない場合には、聞こえてきた音を、そのままカタカナでメモしておく。

具体的な教材例として、アメリカ映画「スパイダーマン2」を活用した小テストの例を挙げる。このシーンでは、スパイダーマンというヒーローでいることに疲れてしまった大学生のピーターに、「人間はそれぞれ自分自身の中にあるヒーローの部分を大切にすることが必要」なことを、伯母(May)が伝える台詞がある。この台詞を含むワンシーンの英語の台詞を授業で勉強した後日に、次の部分を小テストの対象とした。

(次の台詞の文中にある they や them が指すものは、「ヒーローを求めてヒーローを応援してきた人たち」のこと)

May: (And years later, they'll tell how they stood in the rain for hours just to get a glimpse of the one who taught them to hold on a second longer.):
問題1 - この () 内の英文の台詞を3回聞いて、日本語に訳す。あるいは聞こえてきた音をそのままカタカナでメモする。

(I believe there's a hero in all of us ... that keeps us honest..., gives us strength..., makes us noble..., and finally allows us to die with pride.)

問題2 - この () 内の英文の台詞を3回聞いて、英語で書き取る。あるいは聞こえた音をそのままカタカナでメモする。

Sometimes we have to be steady and give up the thing we want the most.
Even our dreams.

学生は小テストの後に、自分の解答やメモしたカタカナをみて、発音の強弱など英語の基礎知識を活用して、なぜ自分はそのような解答をしたり、メモを取ったのかについて、考えてみる。

次に、カタカナで書き取った音が、なぜそのように聞こえたのかを自分で考えてメモをする。また、将来このような洋画の台詞を聞きとれるようになるためには、どうしたらよいとおもうか、自分で考えてメモする。これは、学生の自主学習への支援でもあり、学生が自分で問題解決を試みる体験をする機会でもある。これらのメモが書かれた小テストを提出してもらい、筆者は後日学生に学習のポイントなどをアドバイスしている。以下に英語習熟度がかなり初級者レベルの学生のメモの例を一つ挙げる。

イヤー how ストゥー rain grim hold out... セCOND long 雨の中、長い

(参照用の解答例：そして何年かして、彼らは語りつぐでしょう。／どうやって雨の中、何時間も立っていたかということ／あと少しだけがんばって、と彼らに教えてくれた人をただ一目見るために。And years later, they'll tell how they stood in the rain for hours just to get a glimpse of the one who taught them to hold on a second longer.)

学生のメモ：早くてほとんど聞きとれなかった。強く発音されている単語が少し聞こえた。確かに弱く発音されている部分の単語の音がつながっているの、聞きづらかった。和訳はもっと難しいと感じた。自分へのアドバイスとしては、英語の弱く発音される部分の音の変化に慣れることと、シャドーイングをしたり音読したりして、しっかり勉強して長文に慣れる必要があるとおもった。

また、2問ともほぼ全て聞きとって解答することができている学生たちのメモには、「確かに弱く発音される場所は音が変化して聞きづらかったため、自分でも他の映画なども観て、この勉強を続けていくことで、変化した英語の音にも慣れていくのではないかと感じた。この学習法は自分に合っていて、続けられそうだ。」などと書かれていた。

4. 英語は音で表現されていることの紹介

例えば映画の台詞などでもそれを英語の語順のまま意味のかたまり (sense group) ごとに丁寧に理解 (キャッチ)する学習ばかりに偏ると、学生の多くは、視野が狭くなりがちである。そのため、言語上の情報に限らず、学生が自分の五感や第六感や心で相手を感じることで、より相手の真意を理解することが可能になることも伝えている。英単語はその音で意味を表しているものもあるため、その例を挙げてその感覚を紹介する。

例えば、puddle (水溜り)と、pond (池)をそれぞれ発音して学生に聞かせ、音の広がりなどの感触から、どちらのスケールが大きく、または小さいかについて、学生に推測してもらおう。学生にもリピートして発音してもらおうことで、さらに推測してもらおう。この問いには多くの学生が正解するが、正解するかどうかは肝心ではなく、間違えてもよいので、学生には英語の音からその意味やスケールを想像してみることが肝要だと紹介することを、大切にしている。

5. 英語には情報のやりとりを超えた深い世界が存在することの紹介

授業では情報のやりとりとしての英語を理解し運用するための学習も行うため、英語学習への深い意欲や興味までは持ち合わせていない学生たちのほとんどは、英語で情報をやりとりできればそれが終着点だと考えがちである。例えばTOEIC (5点から995点で採点される試験)で900点台のスコアを取得しているのに、実際の英語のコミュニケーションができなくても満足している学生などもその一例である。そのような学生の誤解を解くためにも、次のようなことを授業では紹介している。

例えばビリー・ジョエルの作詞作曲した*Honesty*という曲で、ビリー・ジョエルが若い頃に収録したものと、還暦近い頃に収録したものの、異なる2つのバージョンを学生に聴いてもらい、どちらの方が、伝えようとしていることが自分の心に響いた感じがしたかを、学生に選んでもらった。これは、同じ人が作り歌っている同じ曲なのに、異なる響きが存在し、また伝わり方も違う事実もあることを、学生に体験してもらおう目的で行った。

次に、音楽のサビに当たる次の部分を学生に紹介し、ビリー・ジョエルの言う *honesty* とはどのようなものかをどこまで理解しているか、学生に問いかけた。

Honesty is such a lonely word
Honesty is hardly ever heard

Everyone is so untrue
and mostly what I need from you

(*Honesty* より抜粋)

この「誠実」や「正直」について、筆者には自分なりの理解はあるが、その理解の意味も時を経て変化していることや、今でも恐らく全ては理解し切れていない自覚のあることを、学生に伝えている。相手の真意や、あるいは真実などに関する英語の理解には、人間の成長や経験を必要とするために、受験勉強の要領のように即席で理解できることはなく、ある程度の年月を必要とすること、さらには年月をかけても一生わからないことさえある事実も、学生に紹介している。このような紹介により、例えば英語を専攻していない学生でさえも、英語をとらえる視野が広がるなどの変化がみられる。

V. おわりに

様々な学生の学習支援をする際に、英語の基礎学習支援は適格なものの一つであると筆者は認識している。基礎学習には普遍的な側面があるために、たとえ英語学習に関心のない学生にも基礎学習は関係があり、他方、英語の世界をもっと深く知りたい学生の支援にもなる。本稿で記した実践例以外の基礎学習支援については稿を改めるが、筆者が担当した基礎学習を真面目に行った学生の多くが、TOEIC スコアに換算すると、1年弱の間で100点～300点の伸び幅で、スコアを伸ばしていた。

いにしえより真実を探究・継承する場である大学で学ぶ学生たちが、人間としても英語学習者としても、その土台を築いて磨く支援の一端を担う立場の一人として、自分自身の人間としての基礎を磨いて、時代とともに変化する学生の現状にも向き合いつつ、今後も基礎学習支援の探究と実践をすすめて、考察していく所存である。

参考文献

- Ellis, R. (1994). *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford: Oxford University Press.
- 小津安二郎(2010).「僕はトウフ屋だからトウフしか作らない」、東京:日本図書センター.
- 夏目漱石(2007).「文学論(上・下)」,東京:岩波書店.
- 夏目漱石(1978).「私の個人主義」、東京:講談社.
- 前田昭彦(1997).「外国語教師夏目漱石」、長崎:長崎大学留学生センター紀要第5号.
- 山田雄一郎(2002).「夏目漱石「語学力養成」再考」、広島:広島修大論集第43巻第2号(人文).
- 羽鳥博愛(1996).「国際化の中の英語教育」、東京:三省堂.
- (CD)
- Carpenters. (1995). *Carpenters*. [Music CD]. Polydor KK.
- Crosby, B. (2000). *Merry Christmas*. [Music CD]. MCA.
- Joel, B. (1998). *River of Dreams*. [Music CD]. Sony Music Entertainment.
- Joel, B. (2004). *Piano Man: The Very Best of Billy Joel*. [Music CD]. Sony Music Entertainment.
- Takada, T. (2015). *Jyonetsu*. [Music CD]. Shiawasekobo.
- (DVD)
- Cuaron, A. (Director) (2004). *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*. [Motion Picture].
United States: Warner Bros. Pictures.
- Olivier, L. (Director) (1948). *Hamlet*. [Motion Picture]. Tokyo: Cosmic Publishing Co. Ltd.
- Raimi, S. (Director) (2004). *Spider-Man2*. [Motion Picture]. United States: Columbia Pictures.
- Raimi, S. (Director) (2007). *Spider-Man3*. [Motion Picture]. United States: Columbia Pictures.
- 柳沢新治(監修)(1970). [舞台DVD].「能 鉢木」、東京:NHKエンタープライズ.

Abstract

College students have different purpose of learning English. They also have different learning experiences of English. Strictly speaking, even students who are divided into groups based on their English proficiency levels vary in nature. All things considered, I think helping students to learn basic knowledge and use of English can be useful and meaningful for all kinds of students. With this knowledge, students can understand and use English to a great extent. Moreover, students can even find the universality and truth in life in learning basic knowledge of English. It can be learned in the same way as we learn basic learning skills in our lives, so not only the students who are eager to learn and use English, but also those who have little interest in learning English can benefit from learning the basic knowledge and use of English. This paper describes the value of helping students who consciously/unconsciously need to learn the basic knowledge and use of English and shows some examples of such practice in my classes at several colleges.